



スペインから墓参り

中村忠司さん(69歳) ダイアンさん(72歳)

この秋、中村夫妻はスペインのバルセロナから忠司さんの両親の法要と墓参りに訪れた。これまで忠司さんは、叔母さんと今回も同行した従姉妹の3人でお参りしている。ただ夫妻2人揃ってのお参りは、母親の葬儀と埋葬の時以来21年ぶりだ。

「来年はお母さんの23回忌ですね」との院首の言葉に、ダイアンさんは「NO！ 来年はまだ22年目です」と英語できっぱり答えた。「法事は数え年なので満より1年早くなります。でもよく覚えてますね」と言う中、「私の祖父母はスペイン人です。スペイン系の人たちは、実際の両親も義理の両親もとても大切にします。お義母さんが亡くなったのは1998年、忘れたことはありません。」と語る。

忠司さんの母親が平成2年に安穩廟を求めたのが縁の始まりで、以来30年になる。2人は京住院に2泊3日、小春日和のなかでゆっくり過ごした。忠司さんは「こちらのことはいつも姪に当たる姉の娘に任せています。久しぶりにお参りできて、両親が喜んでくれたかと思うと何よりも嬉しい。」と話す。

(院首記) (2ページに続く)

妙の光

復刊109号



がつきおさ ふだくば

月忌納め(お札配り)

12月中に地元の檀徒宅へ、来年のお札を持ってお経に伺います。県外等でお札を希望される方にはお送りします。

除夜の鐘・お焚き上げ

12月31日 午後10時30分から

除夜の鐘は31日午後10時30分から、大玄関受付で整理券を配布します。本堂で除夜法要があり、鐘はどなたでも一人ずつ必ず撞いていただけます。温かい甘酒、コンニャクの用意もあり、たくさんの方たちで賑わいます。

11時半ごろから古いお札、しめ縄等の「お焚き上げ」もあります。当日お持ちになれない方は、事前に祖師堂の受付箱にお入れください。



年始参り

1月1日・2日 午前9時～午後4時

住職が大広間でお待ちしています。受付は大玄関です。ご家族そろってお気軽にお出かけください。1日はお茶席のご用意もあります。



あとがき

お会式の落語会では、愚息が前座を務めさせていただきましたありがとうございました。今号には、久々に「渚から」が載りました。院首夫人なぎさんの近況報告です。療養中ですので今後も不定期掲載になります。行事で皆さんにお参りに来ていただくのが、なぎさんの元気の素です。大晦日・元旦にお待ちしております。(新倉理恵子)



厄除け祈願祭

2月1日(土)・2日(日) 午前10時から

厄年の早見表は別紙チラシにありますので、ご確認ください。厄年以外の方のご祈祷もお受けいたします。同封の返信用ハガキにてお申込みください。



信行会とボランティア

1、2月の月例信行会とボランティアはお休みです。次回は「信行会」3月1日(日)、「ボランティア」12月15日(日)です。「お寺でヨガ」は3月までお休みです。



《お詫び》

前号108号の三流亭楽々さんインタビューに、幾つかの誤りがありました。新潟落語会の定席「ほのぼの寄席」は新潟市古町藪蕎麦で毎月第4土曜日午後2時開演です。ご迷惑をおかけしお詫び申し上げます。詳細は三流亭楽々さんのホームページをご覧ください。

<http://www.rakuraku-rakugo.sakura.ne.jp>

スペイン在住 中村忠司さん(69歳) ダイアンさん(72歳)

母親が熱心な日蓮宗信徒

東京に暮らしていた母親のウタ子さんは、亡き夫の墓をどこに建てるか悩んでいた。長男はアメリカに暮らし、娘も嫁いだから跡継ぎがいなかったのだ。そのときNHKで放映された安穩廟を見て決めた。夫の埋葬後は、ひとりで度々妙光寺を訪れお参りした。

アメリカで両親を想う

忠司さんは大学を出て就職したがアメリカに憧れ、29歳のとき働いた貯金を基に渡米を計画した。両親は跡継ぎ息子だからと猛反対したが、最後は「自分の人生だから自分で選べば良い。援助はしないが乞食にだけはならないで」と了承した。ロサンゼルスで英語を学びニューヨーク生まれのダイアンさん



忠司さんがいつも持ち歩く両親の写真の中に、七面山本堂前で若い頃のウタ子さん(右端)の写った1枚もある。

と結婚して、日系の企業で働いてきた。父親の義夫さんは戦争当時潜水艦の乗組員だった。撃沈されて海に漂ったとき、一人また一人と仲間が死んでいくのを目の当たりにしながら、強靱な体力でただ一人生き残った。その辛い体験を忠司さん

には生涯で1度しか語らなかった。「その父が亡くなったとき僕は泣いても帰れなくて、アメリカで泣きました。その父も僕がいなくなつたあと寂しさで泣いていたと後で母から聞きました」思い出を語りながら込み上げてきてしまう忠司さんの背中を、ダイアンさんが優しくさすっていた。

最終の新幹線に乗った。そしてちょうど1ヶ月後、アメリカから戻った忠司さん夫妻と姪の3人で、本堂に遺骨を安置して葬儀を営み埋葬した。相談を受けた際の打合せ通りだった。今回は、そのとき以来の夫婦揃つてのお参りなのだ。

スペイン移住

「お義父さんの亡くなった翌年、お義母さんがアメリカを訪ねてくれました。『日本人のお嫁さんと変わらないわね』と私を暖かく受け入れてくれたとても嬉しかった。」

「私たちは5年半前に仕事を辞めて、暮らしやすいスペインの田舎町に移住しました。慣れない初めの頃、私は一時心を病みました。スペイン人は決して裕福ではないけど、皆とても優しいのです。家族も友達も近所も大事にするので、その中で元氣になりました。お墓参りは、遠いので都合の付いたときだけです。それでも気安く迎えてくれるオープンで厳かな妙光寺が大好きです。」ダイアンさんは日本語交じりの英語で語ってくれた。

(院首記)

安 穩

のび太とドラえもん

小川良恵

この11月で住職を交代してから2年が過ぎました。皆さんから「板についてきましたね」「賞禄が出てきました」と言っていたことも増えました。賞禄の方は、体重的な意味もあるのかなと、冬に向けて少し反省する日々です。このままではドラえもんのようになってしまいます。

のび太は私たち

ところで、日本では大人にも子どもにも人気のドラえもんですが、海外では教育に悪いとして放送規制がされている国もあるそうです。怠け者で意気地なしののび太の我儘を、なんの努力も苦勞もなく、ドラえもんが便利な道具で叶えてしまう……という理由です。確かに、自由気ままにドラえもんの道具を使い、楽しい思いをしているのび太ですが、あまりに自分勝手過ぎて、ほとんどの場合しっぺ返しを食らっています。

このようにいつも煩惱に惑わされ、失敗しているのび太は、私たち自身の姿でもあります。だからこそ、自分の傍らにもドラえもんがいたらと親しみを感ずるのではないのでしょうか。ドラえもんの作者、藤子・F・不二雄も「のび太は僕自身」と語っています。

のび太の菩薩行

『法華経』では、「煩惱即菩提」を説いています。煩惱が菩提に至るための助けとなる、ということ。私達が「のび太」を憎めないように、自分自身が煩惱に囚われているからこそ、その苦しみ共感を覚えることが出来る。そして苦しみから救いたいという願いが生まれる。だからこそ、煩惱は菩提に至るための助けとなるのでしょう。

『のび太の結婚前夜』という映画があります。成長し大人になったのび太と、しずかちゃんの結婚のお話です。結婚式の前の夜、両親と3人きりのお祝いをささやかにしていたしずかちゃん。生まれ育った家を出る最後の夜。眠る前に、お父さんの書斎に「おやすみなさい」の挨拶をしにいきますが、育ててくれた両親と離れることへの寂しさや新しい生活への不安などから、お父さんに「お嫁にいくのを止める」と泣きついてしまいます。その時に、お父さんがのび太君のことを次のように語ります。「あの青年は人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむことができる人だ。それがいちばん人間にとってだいじなことなんだからね。彼なつ、

まちがいなくきみをしあわせにしてくれるとぼくは信じているよ」

“人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことができる人” まさに菩薩の行いです。のび太はドラえもんとお会って成長したのです。

ドラえもんはいなくても、いつも仏様が

日蓮聖人は、御遺文の『開目抄』で「それ一切衆生の尊敬すべき者三つあり。いわゆる主・師・親これなり」と説かれています。主・師・親の三徳を備えた仏様を尊敬するという意味です。

ドラえもんは、超能力に等しい道具でのび太を守ってくれ、度が過ぎた我儘を諫め、どんな失敗をしてもいつても暖かく見守ってくれる存在です。ドラえもんとおのび太の関係は、仏様と我々の関係のように見ることが出来ます。我々も、のび太のような凡夫である自覚を持ちながら、「人の幸せを願い、人の不幸を悲しむ」そんな気持ち忘れぬよう、生きていきたいものです。

私たちの傍にドラえもんはおりませんが、仏様はいつも傍にいらっやいます。

◆お会式・記念落語会

11月4日(祝)



日蓮聖人のご命日法要『お会式』。妙光寺ではこの日にあわせて希望者に生前戒名の授与式を行います。



授戒する方は、仏様のお弟子になるための講義を住職より受け、式に臨みます。



社会人落語日本一に輝いた三流亭楽々さんの演目は日蓮宗にちなんだ噺で会場はおおいに盛り上がりました。



台所は80人分のお斎の準備で大忙し！

◆中野亘陶展

10月31日(水)～11月4日(月)



恒例となった中野亘さんの作品展。その器の魅力に今回もたくさんの方が訪れました。



祖師堂ではお会式と戒名授与式が肅々と執り行われました。



午後の記念落語会。前座は若き安穩会員、新倉拓さんが務めました。



お勝手当番の女性陣。今回もおいしいお斎をありがとうございました！



寺のうごき 秋



◆秋のお彼岸 9月23日(祝)



法話は田村上人が「十界曼荼羅と法華經の光」についてお話されました。



当番さん手作りのお斎は、地元の新鮮な野菜を使い、おいしいと評判です。



墓地でのお彼岸合同法要

◆総本山身延山久遠寺団体参拝旅行

9月28日(土)～9月30日(月)

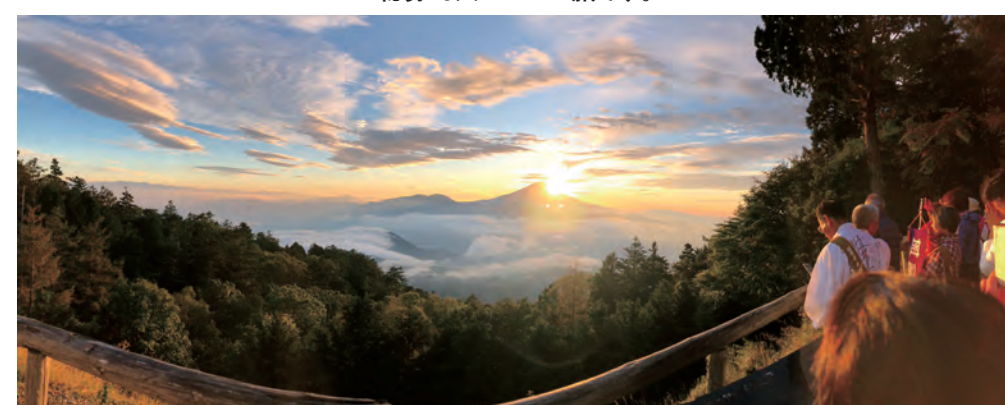
七面山参道の坊では私たちより先に野生の鹿がお参りに…！



総勢19人のバスの旅です。



門前の旅館で夕食。みなさん和我あいあいと。



標高1982mの七面山から望む富士山からのご来光は美しく感動的でした。

本堂落慶から二十年のご縁



妙光寺では、夏の「送り盆」をはじめ
コンサートや舞踊など、様々な催しが行われます。
そのたびに照明などの舞台づくりで
活躍してくださるのが木本博さんです。
木本さんに、波乱の人生と
妙光寺とのご縁についてうかがいました。



左・全国行脚の記録 右・愚安亭遊佐さん

Q 広い家ですねえ。（インタビューは加茂市長谷にある木本さんの自宅で行った）玄関も、まるで料理屋さみみたいですよ。

木本 お医者さんの別荘だった家を借りているんです。ここは加茂市街から離れた山里の19軒の集落です。平屋ですが建坪は100坪あります。近所の人たちから野菜や米をもらったり、車があれば生活も不自由はしないけど大きな屋根の雪下ろしが大変です。そこが困りますね。

Q そもそも木本さんは、何をやる人だったんですか？

木本 私は東京の新宿で育ちました。大学は経済学部でした。昭和21年（1946年）生まれなので大学卒業は2968年です。ああいう時代だったので授業はないし卒業証書も郵送されてくる状態でした。大学4年からデザイン会社でアルバイトをして卒業後はその会社で働きました。1970年の大阪万博の仕事もして、仕事は本当におもしろかった。でも万博が終わったのを一区切りにして会社を辞めました。

Q えっ！辞めちゃったんですか？

木本 デザイナーとしての自分はどうなん

始まった時代です。

Q それで木本さん自身はいつから演劇をや？

木本 ある時友人から誘われて、新宿ゴールデン街の「ムーミン」という店に行きました。それが俳優の愚安亭遊佐——松橋勇藏がやっている店でした。すぐに彼と仲良くなって、毎日一緒に飲むようになり、そのうち松橋が自分で劇団を作りたいと言い出して仲間を集め始めた。「じゃあ、俺やってやるよ」と、3年経っていたので居酒屋はやめて「劇団ほかい人群」に入りました。

Q そして日本中をまわることになるんですね。

木本 初めは東京の劇場で公演していました。私も役者として舞台に立ちましたよ。愚安亭の書く脚本は、当時から彼の故郷の下北半島に題材をとったものでした。それもあって「東京でやっていても仕方がない。お客のところにこっちから出かけよう」ということになって、車に荷物を積み込んで団員6人と子ども1人の計7人で全国行脚を始めたんです。

Q あてもなく出かけるんですか？

木本 初めはそうでした。家を借りて、練習しながらチラシを配って、公民館を借りて上演する。チケットなどなくて代金は投げ銭です。最初は遠巻きにしている地域の人たちも、一度見に来ると喜んで幾度も見に来てくれます。そのうち少しずつ知られてきて次の公演先を紹介してもらい、北海道から沖縄まで千三百回公演しました。

Q 舞台監督をやり始めたのは、その時ですね。

木本 東京で公演している時は、その都度照明や音響のプロが手伝いに来てくれます。でも地方回りになると手伝いは頼めない。その時のメンバーで電気系統が一番得意なのは私だったので、次第に照明・音響・道具・小道具と全般を担当することになりました。各ホールの係の人に教えてもらいながら勉強したわけです。そのことから「あるものでやる」スタイルです。この全国行脚は本当に楽しかった。でも1982年東京公演を終えた後、「ほかい人群」を退団しました。3年目でした。

Q 3年ごとに変える生き方ですね。それでどうしたんですか？

木本 相模原に日雇い労働者の寮があつて、そこに住み込んでガラス工場で働きました。日雇いの不安定な身分だけど生活はできる。いろいろな人と出会いました。でも5年経ったところで辞めることにしました。

Q そこから演劇の世界に戻るんですね。

木本 ゴールデン街にチャット行ってみたら、愚安亭遊佐が一人で芝居をやっていて、これから新作を作ると言う。では彼の一人芝居の専属スタッフになつて2人でやろうと、その時から「遊佐企画」を名乗っています。新作は下北半島の漁師たちを描いた一人芝居でした。愚安亭の故郷は原子力船むつつの母港になった浜で、彼の父も兄も漁師なんです。その芝居で2人で全国行脚をしました。前回の行脚で知り合った方々が全国にいたし、反原発の集まりなどにもたくさん呼んでもらいました。

Q 新潟にはいつ来られたんですか？

木本 愚安亭の奥さんは眼科医で、彼女の故郷が加茂市なんです。それで20年前に加茂に家を建てて開業することにした。それなら私も加茂に行こうかということでのこの家を借りました。

Q 妙光寺とのご縁は？

木本 愚安亭遊佐は新潟に縁のある作品を作りたいと思って調べていまして、巻の写真家・斎藤文夫さんから角海浜の資料をいただきました。それで原発予定地だった角海浜のことを知り『角海浜物語』という一人芝居を作った。そして2001年5月19日妙光寺本堂落慶行事の一環として院庭で公演をしました。その時が最初ですね

Q それは本堂落慶法要当日ですか？

木本 落慶法要の一環で芝居をしたので、別な日です。落慶の後ですよ。あれ？でも落慶法要の時、僕はその場にいたなあ。落慶法要の小川住職（現院首）の奉告文は、本当に率直で素晴らしい。小川さんは奉告文を読みながら男泣きしました。先代のお父さんの苦労と自分の今日の苦勞が、浮かんできたんですよ。「素直ないい人だなあ」と感激してお手伝いをするようになったんです。

Q 以来20年近く、イベントのたびごとにお世話になっていますが、印象に残っている行事はなんですか？

木本 なんとこれも2001年3月、開創700年の身延山久遠寺本堂の大法要です。私も大きいホールでの仕事はたくさん経験しましたが、あの高さと広さとスケールは初めてでした。一年前から下見に行つて法要の流れを確認しました。びっくりし

たのは本堂の太鼓です。太鼓の専門家である鼓童も、あんな大きい太鼓は見たことがなくて「これは鼓童には叩けない。信仰の力で毎日叩いているお坊さんでないと無理だ」と言っていました。

Q 毎年夏の送り盆も大変ですよ。

木本 最近はスタッフもみんな慣れてきていて、だいぶ楽になりました。安穩廟の芝生にステージを作ったり、灯籠を参道に並べたり、いろいろやりましたね。私は頼まれるとできないことはできないと言いますが、たいいていのことはできちゃうので実現してきました。作った機材はすべて倉庫に片づけてあるので、いつでも使ってください。妙光寺は大変なことがあつても、それを支える人の輪があつて、いつも最終的には何とかなっているところが素晴らしい。

Q これからの妙光寺に期待することをお願いします。

木本 大変だと思うけど、良恵さんには頑張してほしい。これからも私ができることは、ずっとお手伝いしていきたいと思っています。今は世代交代の時期です。私がやってきた仕事も、次の人に引き継がなくてはけません。次は後継者を育てたいと自分なりに考えています。

後日記録を確認し、本堂落慶の前年2000年11月5日お会式で愚安亭遊佐さんの一人芝居『飯沼さんへの手紙』を上演していることがわかりました。木本さんとはこの時以来のご縁です。今後ともよろしく願います。

（聴いた人 編集部・新倉理恵子）

過去世と未来世のあいだにある「今世」

『化城喩品第七』

因縁説—仏様と私達のつながり

『法華経』は、我々の能力の違いに合わせ、3つの方法を使い分けて教えを説きます。これを、法説・譬喩説・因縁説の「三周説法」といいます。真理をそのまま説く法説、譬喩話によって説く譬喩説はこれまでの章で顕されてきました。『化城喩品第七』からは因縁説、つまりお釈迦様と弟子達・私達が過去世からの強い因縁をもって、仏の世界へ導かれる教えが説かれています。

だいっつうちしょうぶつ

大通智勝仏の王子

さんぜんじんでんこう

三千塵点劫というはるか昔、大通智勝仏という仏様がいました。出家前は国王だった大通智勝仏には16人の王子がおり、息子たちも修行を積んで全員が仏となりました。息子たちはそれぞれの世界に遣わされて、仏法を説きました。そして私達の住むこの娑婆世界へ遣わされたのが、16番目の王子であるお釈迦様です。

註:「三千塵点劫」…途方もなく長い時間のたとえ。久遠(永遠)の意

前世からお釈迦様と因縁があった

お釈迦様は修行中であった見習い僧の頃から、父である大通智勝仏に代わり、弟子達に教えを説いてきました。ここで娑婆世界に生きる私達こそが、その弟子達であったことが明かされます。前世でお釈迦様の教えを受けた私達は、今世でも、また未来世でも、たった一つの悟りに至るまで教えを受け続けることが出来るのです。

まさ

けじょう

当に前進すべし。これは化城なるのみ。

章題の化城喩とは、悟りへ至る乗り物は一つだけしか無いことを説いた喩え話です。果てしない旅を続ける商隊が、目的地の遠さに疲れ果ててしまった時、指導者が道半ばに幻の城を造り、皆に休息を取らせて希望を抱かせ、旅を続けさせたというのです。修行を積んで悟りを得ることは本当の悟りではなく、全てのものが共に仏に成ることこそたった一つ、我々が目指すべき境地であることが説かれています。

角田山妙光寺インフォメーション

参道舗装工事

境内が砂利敷で歩きにくい、車椅子も使えないとの声に应运、この度ようやく参道を整備しました。夏前に山門前の石張り、車椅子用迂回路のアスファルト舗装を終えました。そして客殿玄関前と本堂参道の繋ぎをコンクリート小砂利洗い出しにして、駐車場から冠木門までを舗装しました。

小砂利洗い出しは市販の石材だけでは暗い印象になるので、メダカ飼育水槽に使うピンク色の小砂利を混ぜました。これが想像以上の効果で工事業者も驚くほどです。特に雨に濡れると、桜の花びらを散らしたようなしっとりした華やかな感じ。それでいて普段はこれまで



の境内に違和感なく溶け込んでいます。費用は故山田和歌子さんの遺産を中心に、皆様からの浄土基金ご寄付を充てさせていただきました。感謝申し上げます。当初は山門前の橋から墓地方向50mの舗装も計画しましたが、面積が広くて予算を大幅超過したため今回は断念しました。次の機会までお待ち願います。

「安穩廟・池の上」増設

安穩廟の申込み希望者が途切れず、最近では従来の檀徒の方からも増えている、お断りも出来ません。さりとてむやみな増設は将来の維持管理に問題があります。この度、従来の「池の上」に増設の形で計画し、行政の許可が下りました。

56区画の増設を来年雪解けに着工し、夏の完成を予定しています。現在予約受付中です。完成後順番に区画を決めていただきます。現在「池の上」をご利用の方には、工事期間中ご迷惑をおかけします。安全最優先で進めますので、ご理解ご協力お願いします。

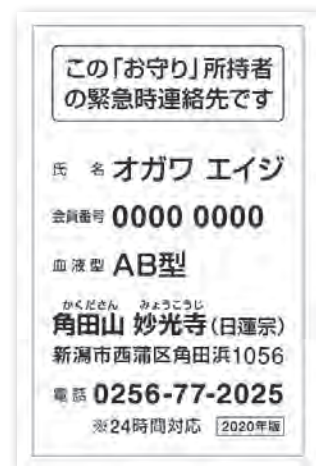
お守り型緊急時連絡カード

以前、ひとり暮らしの方からの依頼で、妙光寺の電話番号を緊急時の連絡先として記入した携帯用カードや、自宅掲示用の紙を作りました。近年は高齢者だけの世帯に限らず、若い世代と同居の方でも、昼間は留守で緊急時に連絡が取れない家族が増えています。



南無七面大天女 二〇二〇年 御守護

角田山 妙光寺
緊急時連絡先(裏面)



そこで財布に入る『お守り』で、裏面に緊急時連絡先として妙光寺の電話番号を記入したカードを準備中です。外出先等で倒れたりした場合、発見者から妙光寺に通報があればかかりつけ病院の情報も伝えられる等の対処が速やかにできます。関心のある方はお問い合わせください。

新型スピーカー購入

妙光寺の本堂は音の反響が強く、読経には良いけれど法話などの声が聞き取りにくいと言われます。反響を減らす方策を採るとお経が響かなくなり、音の指向性の高い専門のスピーカーはとても高額で対応に苦慮していました。

最近こうした問題を解決する特殊なスピーカーが開発販売され、お寺や空港で好評との報道を目にして、早速購入しました。その効果は、高齢者にも自然な音として聞きやすいとお会式の落語会で実証されました。浄土基金の一部を活用させていただきました。

「靈山浄土で会いましょう！ 元気？ のご報告」

インド靈鷲山からの風景 (2015年の団体参拝で)

おかげさまで、穏やかな毎日です

寒くなりましたね。いかがお過ごしですか？
昨年病気で休ませていただいてから色々ご心配をおかけしました。おかげさまで、今は治療をしながら穏やかに毎日を過ごしています。癌という病気を誤解してしまっていて、再発したときには「もう死ぬんだな」と思って大騒ぎをしました。(死ぬ死ぬ詐欺といっているのですが) 恥ずかしくて穴があったら入りたいほどです。

行きたかったところに旅行をしたり、食べたいものを食べに行ったり、院首さんとも長い時間を過ごし、家族が集まる時間も増えました。あせるようにやり残したことを考える毎日でした。割と冷静だったと思うのですが、今考えれば混乱していたのでしょう。この1年半をやり直したい(笑)

行事においでください

お寺のことはみなさんが支えて下さいました。もう私がいなくても大丈夫です。行事も減っていません。スタッフの負担は増えたかもしれませんが、頑張ってくれました。若いスタッフが増えたので、より気楽な雰囲気のお寺になっています。役員はじめ、皆様のお力は多大なものでした。

お願いがあります。行事のたびに地区当番の方々美味しい食事を用意しています。ところが最近行事に参加する人が減って少しがっかりなので、どうぞお参りに来ていただけないか。よろしくお願いします。

今日一日を大切に

私の現在の状況は、薬での治療が中心です。抗がん剤は効き目がなくなると次の薬に変わりますが、今は4個目の薬を継続中です。リンパ節に転移をしているのでステージ4ですが、体重も減らず、副作用のないときは普通に暮らせます。癌が治ることはもうなさそうですが、現状のまま持ちこたえればまだまだ生きられるようです。

まだ還暦前なのに、自分の死がとても身近になってしまったこの出来事。お寺という死が特別なものではない環境のなかで、当たり前のように死を語れる僧侶が家族にいたこと、たくさんの先輩が旅立って逝かれたこと、インドで法華経信者が死後に行くと言われた『靈山浄土』の下見が素晴らしかったこと、さまざまな経験が糧になり案外すんなりと死を受け入れることができています。

「死ぬのも生きるのも辛いな」という気持ちになったとき、とりあえず今日一日を平穏に穏やかにと願いつつ。人間は致死率100パーセント——その大切な一日を過ごすつもりで。

あと病気は本人より家族やまわりの人の負担が大きいの、なるべくわがままを言わず、出来ることは自分でやり、いつもにこやかに。

すべての皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。



Q「星祭り」とはなんですか？

「星回りが良い」という言葉を一度は聞いたことがあるかと思います。人にはそれぞれに運命を左右する星があるという考え方です。

その星を供養することで、一年間の厄を除き幸せを招くように祈るのが「星祭り」です。本来の仏教にはない教えですが、日本に仏教が広まる過程で、中国の陰陽五行説や道教が取り入れられ、古くから信じられてきました。

また『法華経』には三光天子という太陽・月・星の化身が登場します。日蓮聖人が斬首されかけた折には、不思議な光る玉の出現によって難を逃れたことから、日蓮宗でも三光への信仰は深いものでした。このため日蓮宗の「星祭り」では、北斗七星・北極星の神格化である妙見菩薩を供養します。天変地異等の災いから国を守り、人々の寿命や幸いを増す菩薩を祭ることで、病気や災難から身を守り一年の安泰を祈るのです。

妙光寺では元旦の朝に「星祭り」祈願を行います。希望者には、家族全員のお名前と星が記入されたお札をお届けしています。今年は別紙チラシにて、今までご案内をしなかった檀信徒の方にも、お札をご案内しています。どうぞ、お申込みください。